

野菜農家の春夏秋冬

～労働と生活編～

増田祥世



皆さんこんにちは。長沼町で野菜農家をしている増田です。春から四回書かせていただいたこのエッセイも、今月で最終回です。今回は農家が一年を通じて一体どんな生活をしているのか、その知られざる実態を包み隠さず紹介したいと思います（なお、今回の季節の分け方は、あくまで私の体感的な季節の感じ方ですので、ご了承ください）。

■春（二～四月）

わが家の春は二月から始まります。まだ日も短く雪も深いです。二月に入ると融雪剤の散布や玉ねぎの播種の準備に取り掛かります。一月までぬくぬくと過ごしていた身としては、正直、もう少し休んでいたい気持ちもありますが、それでも仕事が始まるのはうれしいもので、冬眠から目覚める動物のように「また今年も春が来たぞ！」と特別な気持ちになります。

二月末には玉ねぎの種まきをします。

わが家は二軒で共同作業をしていて、うちからは夫、義父、私が参加するのですが、普段一緒に働くことのない他の農家の方や義父と一緒に働ける貴重な機会となっています。

三月になると、ブロッコリーの播種が始まります。これは夫と二人で七～一〇日に一回、六月までに合計二三回行い、四月中旬から定植もします。

こんな感じで一年が始まりますが、まだ時間的に余裕があるので、研修会に参加したり、三月には毎年親戚のおばさんたちと味噌の仕込みをしたりしています。冬の間夕食を作ってくれていた義母が少しずつ忙しくなってくるため、私が夕食当番を交代するのもこの頃です。

■夏（五月～八月）

五月になると、義母が花や野菜の苗を出荷し始めます。これが毎年わが家の最初の出荷で、出荷が始まると、ひとつ季節が巡ったような気持ちになります。そ

してGW頃になるとわが家の一大行事である玉ねぎの移植が行われます。普段は家族労働だけです、この期間だけは数人にお手伝いに来てもらうので、その方たちのためにお弁当やおやつを用意します。お弁当やおやつを用意する役割は結婚一年目に私が義母から引き継いだので、おいしそうなものを色々選んで買うのが秘かな楽しみでもあります。

玉ねぎの移植が無事終わればちょっと一息。例年この時期に行われる地区の婦人会の研修旅行に参加したり、去年から栽培を始めたサツマイモの苗を植えたりします。わが家の土壌がサツマイモに向かないため、家族ぐるみで仲良くしてもらっている人の畑と一緒に作っているのですが、このサツマイモが私にとって、これから重要な作物になってくる予感があります。というのも、家で作っている他の作物とは異なり、サツマイモは私が苗を買うところから収穫まですべて自分で行っている唯一の作物だからです。家族から仕事を教わるのではなく、自分

で試行錯誤して、農協の営農指導員の方に相談したりしながら、一つの作物を育て上げることは、私にとっても大きな経験になっています。まだ売るほどの量は作っていないので、来年は本数を増やして、いよいよ販売にこぎつけようと思っているのですが、それだけでなく、干し芋を作って売ってみたい、とか、サツマイモはそんなに手がかからないので、有機栽培にも挑戦してみたい（人の家の畑だけ）、などと夢を膨らませていきます。

六月中旬になるとブロッコリーの収穫が始まり、いよいよ農繁期に突入します。まだ朝露の立ち込める五時前後に畑に向かい、一九時頃まで収穫に明け暮れます（ブロッコリーは涼しい時間帯に収穫するので、一三時〜一六時頃は玉ねぎの除草やブロッコリーの定植等他の仕事をします）。うちは割とはっきり担当が分かれていて、義父母はそれぞれ別の仕事をし、いて終わる時間もバラバラなため、夏は家族全員で一緒に夕食を囲むことはほ

ぼなくなり、一番遅く帰宅する義母とは一日中会えないことも珍しくありません。

最初に「包み隠さず」と宣言したので正直に言うと、今は育児があるので、畑に出る時間は減りましたが、子供が生まれる前は私も朝から晩まで畑にいて、六月頃から文字通り休みが一日もなく（最近計画的に休日を設ける農家もいるようですが、うちは休まないタイプの家）、炎天下の中ひたすらブロッコリーを包丁で収穫して、毎日家と集荷場の往復で唯一の楽しみは集荷場の帰りにアイスを買うくらい。誰とも会わず、家族以外としゃべらない（しかも、義母以外無口）という生活が延々と続くため、だいたい八月頃になると私は毎年二回ほど発狂（？）してしまい、ブロッコリーを収穫しながら遠くに見えるマオイ山に向かって、「やくすみ〜！」と叫びたくなる衝動にかられていました。しかし不思議なもので、疲れは当然日々蓄積してくるので、外で働いていると自分が太陽からエネルギーをもらっている感じが確実に

あるのです。自分のパワーがただ減る一方ではなくて、同時に毎日お日様の力で充電されている部分もあって、だから休みがなくてもなんとかやっていけたのかも、いっつも体を動かしているからというだけでなく、太陽や風などの自然からパワーを受け取っている部分も大きい気がします。(ちなみに、発狂した話を農家の友達にしたら「一年で二回だけ??少ないね。」と言われた)

また、今年は両幌と長沼の女性農業者グループ「ひなたほっこ」のマルシェ部に参加し、直売デビュも果たしました。七月から一ヶ月の間、月に一回くるの杜で野菜を販売したのですが、直接消費者の方の意見が聞けたり、販売方法や価格を自分で考えて工夫したり出来るので、とても勉強になります。そして何より、お客様が目の前で自分の作った野菜を買ってくれたり、ほめてくれたりすると、とてもうれしい!わが家は基本的に農協出荷なので、こういう機会は普段

ほとんどありません。対面販売は緊張するけれど、生産者と消費者がお互い顔を合わせて話をするのはとても大切なことだと実感しました。

■秋(九月～一月)

九月は玉ねぎの収穫です。玉ねぎは晴れているときに収穫したいので、天気予報とにらめっこしながら、晴天が続く日を見計らって、一気に短期間で収穫します。玉ねぎは機械で収穫するのですが、事前に機械が絡まりそうな雑草を引っこ抜いたり、機械が畑の端でリターン出来るように、機械が旋回する場所にある玉ねぎをどかしたりします。これらはすべて手作業で、機械化が進んでも機械をスムーズに動かすためには人力によるたくさんのお作業が必要だというのは、農家になって初めて知ったことでした。

いよいよ機械を動かし始めると、収穫機のコンベアが上がって来る玉ねぎの中から、傷んでいるものや泥石を除けるの

が私の役割です。玉ねぎを収穫したところのある方ならわかってもらえると思うのですが、ものすごい速さで大量に上がって来る玉ねぎを見続けていると、だんだんトランス状態のような、限りなく「無いに近い状態になってきます。こんな状態で長い時間働くので、一日が終わる頃には少しぼんやりしてしまつのですが、ずっと機械に乗っていられるし(歩かなくてよい)、玉ねぎの仕事が終わればその年の仕事の終わりが見えてくるので、それを励みに乗り切っています。

収穫した玉ねぎは鉄のコンテナに入れた状態で少し乾燥させた後、一〇月から一月いっぱいかけて選別・出荷をし、それが終われば、一年の仕事はだいたいおしまいです。

■冬(十二月～一月)

さあ、待望の冬がやってきました!冬は雪も降るし、嫌だなあと思う方も多いかもしれませんが、私にとっては義母が

夕食を作ってくれるし、子守も増えるし、帰省も出来る最高の長期休暇です。ひたすらぬくぬくゴロゴロ気ままに過ごしつつ、勉強会等があれば、少し遠くてもなるべく参加します。勉強会は内容もさることながら、他の参加者の方からたくさん刺激をもらえるので、「自分ももっと頑張ろう！」とやる気で心を満タンにして帰ってきます。

料理に関する活動もたくさんあり、豆腐作りや地区の婦人会の食品加工教室、女性部の料理部会の活動等に参加しています。料理部会は一二月から三月まで四回あるのですが、一昨年から部員が一品ずつ持ち寄って、農協職員向けにランチバイキング（一食三〇〇円）を開き、交流する試みを行っています。農協職員にも食育が必要だということで始めたのですが、これが大変好評で、今は年一回で対象も農協職員だけですが、もっといろんな形で展開出来る可能性をもった活動だと思っています。また、ゆくゆくは自分でもブロッコリーや玉ねぎの加工品を

販売したいので、この冬は色々な試作品を作ってみようと今からわくわくしています。

■ おわりに

駆け足で私の一年間を紹介しましたがいかがでしたでしょうか。「大変そう」と思われがちな農家の生活ですが、意外と楽しく暮らしていることが少しでも伝わったら嬉しいです。実現できるかは自分次第だけれど、夢や希望も持てます。もちろんつらい時もありますが、それはどんな仕事でも同じだと思いますし、農業だけがとくにしんどいわけではないと感じています。むしろ私は、家族と一緒に自然の中で働ける農業っていいなあ、と思っています。自分の子供には農業をさせたくない、という農家も多いですが、私は自分の子供には農業の素晴らしさを伝えたいし、実際に継ぐかどうかは別問題としても、将来、自分もやってみたい！と思われするような農業をしていきたい、

それが今の私のささやかな目標です。一年間読んでくださり、どうもありがとうございました。

増田祥世さん

1979年東京生まれ。

大学院で農協女性部や女性農業者をテーマに研究しているうちに、気がつけば自分も農家の女性に。

8 ha程の農地で、露地ではブロッコリーとタマネギ、ハウスではトマト、ピーマンなど少量多品目の野菜を栽培している。

夫と3歳の息子、夫の両親の5人暮らし。

